

1,011^P

⑩ 1015^P
1019^P

⑩ 1038^P - 3/2 4行

⑩ 1023^P ⑩ 1061^P 1/2

第十四章 洛陽の変遷の歴史

に築かれた

中原 周当初の 郊廓の王城

の起源、およひその後のめまぐるしい変遷の歴史について見てみよう。(以下 第4表 第5、211回参照)

■ 中原の一大都城 洛陽 洛陽の名称が中国の歴史上に現われるのは、非常に早い時期からであって、周の時代には、すでにその名が見られる。

なお、文献の上からはともかく、実際には殷代にまで遡れるのではなからうか、ともいわれている。(古代中国の都市とその周辺に服部克彦、ミネルヴァ書房、七八頁)

木

■ 永らくの間、黄河の中・下流域において、絶大な勢力をふるって来た強大国殷王朝にも、

誇

弱小国
↑
強大

車前史 655⁷ 牧野の戦い
 (周) 紂の北約 150⁷ 紂 21⁷ 太公望 呂尚 4133⁷ 1012⁷
 車前史 667⁷ 紂 615⁷ 太公望 434⁷ 鹿台 2560⁷
 車前史 466⁷ 紂 1268⁷ 渭水 466⁷

その滅亡の日が刻々と迫っていた。
 西のかた陝西省渭水の流域から興った周は
 殷末紂王の暴政をたくみに利用して天下の人
 心をつかみ、遂に殷王朝にとどめを刺した。
 殷の紂王は、牧野の戦いに破れ、鹿台(紂
 王が財宝を貯えてた地)へ逃げ帰ると、火中に自らの
 身を投じた。殷は滅んだ。
 一〇〇年頃の人(を補佐した)の武王(前
 周の周公旦)が、および召公奭(周の太
 公望)呂尚(周の太公望)とあつた。(「東洋史辞典」創元新社)
 紂王(武王・牧野の戦い)第二章(箕子朝鮮国)の項(冒頭参照)
 武王は、商(殷)に打ち勝った後、周の
 商の都である九鼎を、都の洛邑へ持ってきた。
 (「春秋左氏伝」桓公二年条参照)
 九鼎は夏の禹王が鑄て、夏・殷・周の天子に伝えた鼎の
 ことであり、帝位の一しとされたという。(「古史補正」九鼎)
 九鼎大呂(九鼎大呂)参照
 あるいは、すでに洛邑(洛陽)

牧野の戦いにおいて、殷の紂王に勝利した

左五明し 左氏伝は、春秋時代

後代の周の都

周の武王は、戦利品である殷の九鼎を

洛邑の地へ持ってきた

という意味であつたろうか

その後、周王朝は、現在の陝西省西安市(特

別市)の西南、鎬京の地に国都を定め、そ

こを周王朝の本拠として、新たに勢

力範囲となつた。かつての殷王朝の地、つまり

黄河の中・下流域平原(中原)を支配した。

「古代中国の都市とその周辺」服部克彦

ミネルガ書房、七九頁参照

周王朝は、殷王朝の時代の遺産と

いうべき高度な文化を、周王朝が出来た後早く吸

収する必要があつた。

収するためには、殷王朝の地盤であつた中原

地域に、周王朝側の拠点をもうけなければな

らなかつた。

(「古代中国の都市とその周辺」

服部克彦、ミネルガ書房、七九頁参照)

武王の死後、武王の死後、武王の死後、武王の死後、

二代成王(武王の子)の起案になるものか、は定か

実際は 37世、867年といふ。
 ⑦ 1106^P 天7壬

東洋史 713
春秋左 130
漢書 113

37代800系 1061¹-2/2 P
1,014

かき
田月 云々 437^p
田月 云々 437^p
田月 云々 437^p

⑤ 1020 行
計画 空すところ「筆が水た」と言ってる。
⑥ 1024
経営 生産 建設
⑦ 1027 P 首都一城く
副都一筆く
⑧ 1016 -1/2

でないが、やがて――中原の「郊郭」という所に、都城が城かれた。以下巻頭の第4表（周武王）遷都が企図されてい左のであろう。

■武王（在位年数は十年余の次に王位についた周第二代目の成王の時）ト「周都は」はるかに「鎬京」から、中原の「郊郭」の都城へ遷された。「春秋左氏伝」宣公三年「他漢・魏・六朝・唐・宋散文選」平凡社、「一王負」（魏）「異命論」李康（参考）

●「春秋左氏伝」宣公三年条に下こう記され、
魯国のとされる古代中国の三足の銅器を成王がはじめて鼎（王位・権威の象徴）を郊郭にうつし定められたとき、周は幾代・幾年つづくかをトわけられきたところ、三十代七百年と出た。云々

●つまり「一時的ながらも」

△成王は「鎬京」から「郊郭」へ都を遷した、ということが分る。

■それにしても、同じ本「春秋左氏伝」の中に、「洛邑」と「郊郭」とが記載されてあり、わけであり、天には興味深いと思われ。

④ 10/6-1/2

春秋左
180°

时代区分

参照

「ところか」 937-1/2 1025P
1019P 1015P

この所、大なるコウ
1019P 10125P

「小野」 47P 表
史官 対記録する官
1076P

察するところ

これは、何を意味しているのだろうか。
春秋左氏伝 魯国の史官の手になり、
孔子が筆を加えたと伝える史書の編者から、
洛邑と 郊郭とを 明確に区別して区
別していたからではないだろうか。
即ち「洛邑」と「郊郭」とは、全く別の
所を示しているのであろうと推測されるで
その中でこの物語では、
成王は「洛邑」の地にでなく「郊
郭」という所に都を遷した。
と解釈することとし、「郊郭」の都を
へ中原の周当初の「郊郭」の王城
と呼ぶことにしたい。現在では一般的に
ところか 後述するところあり「春秋左氏伝」
と「史記」とを合わせて読み
へ「郊郭」は「すなわち「洛邑」「成周」
の地」である。
と、現在では一般理解されている。第4表「周の時」
「か」この物語では、その通説を採用しな
い。

小野 47P 表

＊

区分の下端参照

1015^P 12^行 1016^P 城郭都市
 1021^P 1021^{25行} 1035^T 1045^T
 1044^P 1021^P 1045^T

追って述べるように、
 漢書

卷二十八上、地理志卷第八上等の記事から、

洛邑 成周 を築いたのは、周公

旦であつた

ということが解る

原の周当初の郊郭の王城を城いたのが、

周公旦だつたのか、それとも他の誰かであつ

たのかは不明である。

おそらく、鎬京から中原の郊郭

遷都するに当り、鎬京の都城と全く

同じ構成の城郭都市を郊郭の地に城いた

だけのことであつて、誰が城いたのかは重要

でなかつたのだろう。

あえていえば、郊郭の王城を城いたのは、

武王、もしくは成王

であらうと思ふ。

*

14行

493

①1042^P-3/3 10年
②1061^P-1/2 末

③798^P 中国の平部18^P
④1038^P-1/2 同

1017^P-1/2

⑤1042^P 中国の平部18^P
⑥1047^P-1/2

⑦1015^P 12^P

⑧1015^P 2^P 811^P

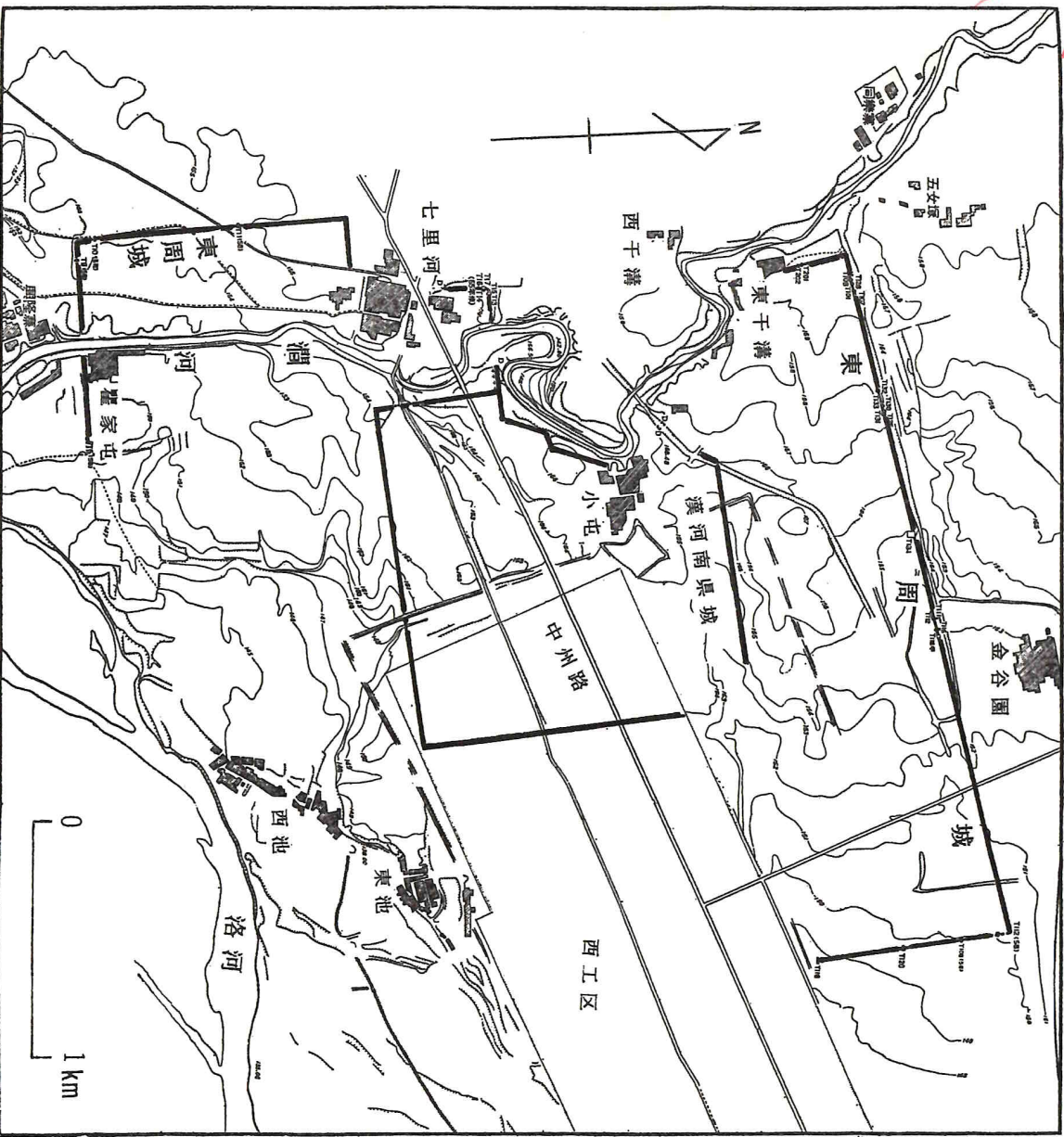
(1)

一番下に殷代の層がある

城壁下の遺物を調査した結果、
水以外には全然見当らない。
大な遺跡が唯一の注目すべき城跡であり、
た結果は、洛陽西方の渭水の東にのこる巨
年間、ちかくまで溯れる故城の遺跡を探索し
（周時代のはじめに鎬京を都とした約三〇〇
村田治郎氏は、次のように述べている。
「今の洛陽城とその近辺で、西周時代
る遺跡（巨大な遺跡）がそうであつたかも知
水な。」「第236図参照」
渭河
（周）
城
か
た
と
考
え
る
べ
き
で
あ
ら
う
か
。
当
初
の
郊
鄆
の
王
城
は
、
い
っ
た
い
ど
こ
に
と
す
水
は
、
こ
の
中
原
の
周
で
な
く
、
郊
鄆
と
い
う
所
に
都
を
遷
し
た
。
今
周
第
二
代
目
の
成
王
が
、
洛
邑
の
地
に
に
せ
よ
と
ころ
で
も
し
も
ほ
ん
の
暫
く
の
間
で
あ
つ
た

・右の半分は2417
 限定一杯大きく掲載。

枠ヒル (城壁を見出たせたい)



1017P-2/2

1406 第236図 洛陽西方の巨大遺跡、洛陽東周故城 (郊郭の王城跡か?)

13 } 『中国周文化考古学研究』 飯島武次、同成社、231頁。
 12 } 『中国の帝都』 村田治郎、綜芸舎、19頁参照。

1206 内側の小城の年代は漢代と見られ、漢河南県城に比定されている。

大池
 三層水、谷の水の裏

『中国の帝都』 村田治郎 19頁と同図 ④1052811

1042-3/5
同文

前七〇〇頃
前七〇〇頃

1042-3/5
1061-3/2
1061-1/2
中口の帝都 20
2036

1033-3/3
異持である

1018
634

(2) その上へ
鎬京が都とされ、水で囲っていた西周時代の層を認め

(3) 全体を通じて大観すれば、東周時代の城壁跡とみるのが妥当である。

(4) さらに、東周時代後半の戦国時代における補修部分も確認された。

このように、遺物の出土状況から見ても、この地域が最も早く開拓され、しかも永く継

続したことが分かる。この城は正方形でなく

屈折を伴う四角形状となり、約三四方の

大きさを誇ったと見られる。主要部のことなのか、

宮城の一郭の南に王城であったと考

え分ではなく、西端の中央部だったと考

えられる。という。中国の帝都「村田治郎

綜芸舎、十八(二)負参照」ともすれば、現在の洛陽の地の方に気を奪

1019^J

⑩ 1015^P 12^分
1038^P 2^分

こと
1061^P 3^分

この巨大遺跡の調査結果は重要である。
① 以下、この巨大な遺跡が示す経過
状況に従って述べておくことにしよう。
なお、この故城中の宮城域のことも、
洛陽西方の宮城と呼ぶことにしよう。
② そしてこの物語では、この巨大遺跡が
洛陽西方の渭水の東に成王の時に短期間
都とされた(中原の周当初の)郊郭の王城
であったろう。
と仮定してみたい。いくことにした。

周公旦 造宮の
しゅうこうたんぞうえい

③ 1092 P
OK 54523

古代中国の都市とその周辺
元 950 80 3 1040 P
改訂 改訂

全図 1044 1/4 4斤
1020 P
改訂

910の都市 18' 10' 8" 81'
古代中国の都市とその周辺

洛邑 成周 周公旦の起用

もともと「郊郭」(中原の周当初の王城)での統治はうまくいかず、都は再び元の鎬京へと

戻された(既述) 古代中国の都市と

その周辺に服部克彦、ミネルヴァ書房 80頁

負参照 郊郭の地はもととも殷の紂王

の地盤であり、この郊郭の地はもととも殷の紂王

色彩を非常に強く残していたことが、その原

とみられている。 周公旦は殷代

諸侯を初めとする多くの殷の貴族のために

新しい都市を計画し、ここに生活の場を与え

たといわれ、これが後世の洛陽の地そのもの

であり、当時は「成周」と呼ばれていた。

トール いかも少々、以後ややこしいが

「漢代の雒陽」ばかりでなく、近くに「漢書」

漢代の河南(雒陽)も築いたという「漢書」

古代中国の都市とその周辺 服部克彦 ミネルヴァ書房 80頁 および八頁二六行

既述

2/周公旦殷民成周 東洋史 321^p
内上居經王世 高文正抄 春秋左氏 401^p 下中經
昭昭 17. 12. 10. 原史 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 8

加丁天
 鼎 $\oplus 1012, 1014$
 $\oplus 1015, 1289$
 $\oplus 1014, 1015$ 相取
 $\oplus 1014 - \frac{1}{2} 1289$
 主寸
 城 $< \oplus 1014, 1289, \oplus 1016 \frac{1}{2}$ 注! $\oplus 1017$
 左A元48
 同取
 $\oplus 1024, 1034, 1092$
 量加矢仁お 差缺88
 紙34 $\oplus 10$
 1.021

卷二十八上、地理志卷第八上、「後漢書」志第十九

周、洛邑を根柢地とし、中原一帯を

支配していった。

つまり、鎬京を、宗周（宗廟のある周の竟）

成周を、東都となし、この東西の二京（首都）

と副都をもつて、周は天下の統治に万全

を期した。のだった。→「東洋史辞典」創元新社

へ周。「春秋左氏伝」昭公三十二年条。「古

代中国の都市と其の周辺」服部克房、ミネル

ヴァ書房、ハ〇頁参照）

米

庄公二十八年条には、

「およそ邑に先祖の宗廟や先君の位牌があ

るものを都」といい、無いものをただ邑

という。都の城壁のばあいは、城とい

邑のばあいは、築くという。

（中原の周当初の）郊鄙の王城には、鼎（王

権威の象徴）が置かれたと理解される（既述）

周公旦によって築か

郡国一参照

217 戦国時代の80年

1014/12 1042/3 1014-1/2 1019 1092/5 119 217 戦国時代の80年 1014/12 1042/3 1014-1/2 1019 1092/5 119 217 戦国時代の80年

第3巻 15-3/4
26' 226' かと下都 1022
1011-31 下吳漢 都吳漢 田1035 1153 車技713

表紙左401P

前6行下

前14行

前色の場合集く

云165P

下町に相当するのかわり知れない
の想像図参照
下都は、我が国の下町や城

東洋史辞典に創元新社へ洛陽参照
洛邑のまわりの庶民の居住域成周は
下都とも称されたであろう。(巻頭の第6図)

これを東都とした
という意味に解される。
なお、成周は下都とも呼ばれたという

一方周公旦が成周(内)に城(洛邑)を築いて
これを東都とした
と記されてゐる。
成王の時
鎬京を首都とし、

また、春秋左氏伝に昭公三十二年条に
「成王は諸侯の力を合わせ成周
に城を築いて東都となし、云々」

先君の位牌などは置かれず
は首都である
鎬京の都に有ったの
先祖の宗廟や

1269P

1294P

構造について

鎬京 (及心) 邨 驛 の

みょう

三
文
一
帛

に

せ
ん
せ
い

HU

ひ

今、西の
方へ

かりで、
地、上、の、家、ら

小林
41
575

秦漢代の匈奴

一から東南方へ進け

片に
お
い
て
亀
ト
て
上

こうしてキ
アズミは
た

車水止世三

土壁や土壇の築造法板

杵でつき固める技法を用

都城を囲む城壁には

には応門を建て

など見える。へ「中国の帝都」村田治郎、

芸舎十三頁。漢和辞典 小林信明、小学館
参照

広辞廿九
八板築

コクヨ ケー20 20x20 の復々行紙

山崎の南園 1541-V₇ 219

⑩ 1026 日

ワの本字 カの 1730¹ 漢魏大朝曆 183¹ 下本³ 行に
" 1733¹ 集采¹ とある

漢魏-文(23)-184^P 宗廟元1294^P 祖廟のみなまや
天のき 改行 1021^P 1304^P 1/5

窓すところ 1015^P 1/5

漢魏-文(23)-184^P

1,024^P 1586^P

やさ

推察するところ

(1) 都城内(外郭城内)の中央に王宮などを

建て、その東と西とに民の住居を連ねさせた

(2) 王宮域に、高門(高門)を立てた

は、阜門(高門)を立てた

(3) 王宮域に、高門(高門)を立てた

先(先)も祭る御霊屋(御霊屋)や宮室を設け、宮室の南正面

周の古公亶父の徳を慕って、人々が集まっ

てきた。一年たつと村落をなし、二年たつと

都会となり、三年めには最初の五倍もの人口

に達した。常に民衆をいたわり、平穩に彼

らを結果したからである。この当時の様子を歌った詩に、

「民を慰撫して居処を定めさせ、左に右に

住まわせる。区分けし条理をつけて、田を耕

畑を作らせる」(大雅・縣)

とある。「漢・魏・六朝・唐・宋散文選」

平凡社、一三三四頁、「晋紀」総論(千宝)参照

米

米

米

米

下 12/18
12/18

＊

のてあろう
20
49

因みに述べると、
「古く殷代においては、
（土地）と口（四方の境界）
戈（ほこ）守備の意）
という。（漢和辞典）小林信明、小学館、二三二
頁へ国（参照）
つまり、もともとは、土地と王宮と戈とを
もって「或」という字が作られ、
「いた」の「あ」
ところ、西周時代にはじめて「
文字が現れる。これは「都市」のまわり
を囲う大きな口状の城郭（外郭城）の中で
人々が武器（戈）をもって土地（一）と王宮
（口）を守るさまを示している。と解される。
（古
代中国）世界歴史シリーズ（3）世界文化社、四
二頁（参照）
即ち、この口（国）と「
王城（王宮）と武器と土地とを囲う外郭城を持
つ王都」の様子を、
ろうで

「小町」第5回

1451
1304-781 1072
2293
3799 (x1ゆう3い、7ではない)

周礼 1072

1281
1012
1026

「小町」第5回
匠人 大工 職工
1304-7/5

周礼の理想都市

詩経

周礼は、周代の官制を記した書で、古くは「周官」、唐以後「周礼」と称するようになった。周公旦の作と伝えられている。しかし、後人が増益したもののようである。冬官一編を補い、六編とした。三礼の一つである。（「周礼」を参照）

さて、周礼の冬官、考工記、下、匠人職工（内匠）で宮廷の工匠であろうか。の条に、匠人宮国、方九里旁三門。國中九經九緯、塗九軌。左祖右社、面朝后市。市朝一夫とある。

なお、ここに述べられている「国」とは、国の首都としての都城の意味である、という。（「古代中国の都市とその周辺」服部克彦、ミネルヴァ書房、一七〇一八頁。「中国の都市」村田治郎、綜芸舎、三三〇四二頁参照）

1026^p

いくぶん 紋令広101 P 改行ない!

小林 491 P

1029 P

1026 P

2h 14h 360 P 1023 P 304-36

大カワ1270
ミシ
大カワ752
デン

カワ238
セシ
セシ
カワ1117

カワ1117

右民塵(すまい)の前朝後市・左祖右社・中央宮闕・左
ようである。

そして、このような王城が、当時の理想と
されただけでなく、実際の王都の構想
として採用されたに違いない(巻頭の第5図

参照)

ルヤ不審なことに

とはいえ、一方に於ては中央宮闕と

市と述べている。

なるほど明瞭でないか、しかし、

へ四角い都城の区域内の正に中央に宮闕が

営まれた

というわけではなくて、

中央線上の前方(おそら北方)寄りに

朝廷、そして後方(おそら南方)寄りに市

が有ったのであろう

と想像される。

このように、都城内の宮闕が幾分北に寄っ

ているとはいって、中央宮闕と

日前朝後市という原則を充分満たしている

と当時の人々は考えていたのであろう

紀元318

詳細は合分らない(34)末~36
HV 1030P

「ヒコウテ」
987P

1133

(周)

TIV

また、成務紀五年九月条には、
東西を日縦とし、南北を日横とす

とある。
御門に瑞山と山さびひます。云々
繁さび立アリ、敵火のこの瑞山は日の緯の大
「大和の青香具山は日の経の大御門に春山と
「万巻一五二」には、
「中国の帝都」

とこうで、
「國中九經九緯」について、
「異論が多いようである。」
「中国の帝都」

1027
139

村田右郎、綜芸舎、三四頁末行、四二頁参照

さらに、鎬京の王都ばかりでなく、
一時居を遷したとされる郊郭の王城(中原の
当初の王城)もまた、前朝後市・左祖右社・
中央宮闕・左右民廛の原則といわれる構成を
もって建設されたものであろうと定かなる
ないことながら想察される。

1031^P

20

20

2037/735^P

ト 腰測ながら、

ア ー て、

へ「緯経」は、横すいと縦すいと

をいう。へ「大字典」上田万年、講談社へ緯

経 ✓

腰測ながら

考え合せると

国中九経

九緯とは

へ都城の東西方向に九つの道筋があり

南北方向にも九つの道筋がある

構成を示している。ようにはあるまいか。

「よう」に次頁より

平面

*

と想

1025
1032P-1/3

な
立ち並ぶ 1398
1083

天つき
改行

それでは

■ 整然としたこれらの道（九経九緯の道路）

は、都城内にどのような配置されていたの

だろうか。

■ 九里四方の正方形の都城の四面の各面に、

それぞれ三門があったというのだから、

対面する門をつなぐ大道が、縦横に配されていたのであろう

像さめる。（古代中国の都市とその周辺 服部克彦、一頁、七行参照）

■ 中国古代の国は、祭祀と軍事を共にす

る。代族制の共同体であり、城郭をめぐらす都市

家であったという。（古代中国の歴史）

ズ、世界文化社、四二頁参照）

ここに、どのような構成にすかは、（外敵の襲

撃から守るのに便利かを考えてみた。

■ も、外郭城に密着して民家等が建ち

並んでいたから、外郭城壁を乗り越え

て都城内へ侵入しようとする敵を追ひ払うの

に不便であろう。我々のうち軍びや兵の進

・ 命の任に当てる兵達が駆けつける際、家屋等が大きな妨げになら

からである。恐れ、古代の中国人は、王宮・民家・市

1025
3行 19

「ところか」
⑩1025P
⑩1036P

世界の7大
中央公論
375P

「あらい」
12頁5行

1032P-2/3

に相違ない

城壁

場等を取り囲む外郭城を高く連らね、その外郭城の内側に沿って、大きな道を一周させたに相違ない。

こうした都市計画は、後代に引き継がれていったと思われる。長安城に同様の構想が見られる。

外郭城の三門、および西端から発する五本の大道があった。と想像される。

ところが、周礼に「國中九經九緯」と

記されており、都城の東西方向に九つの大道、南北方向にも九つの大道があったようである。

もしかいたら、五本の道の間に一本の大道が設けられて、東西方向・南北方向とも

に、九本の大道が形成されていたのかも知れない。

次頁から

ニニに^リ道路^{どうろ}の中心^{ちゅうしん}距離^{きょり}が一里^りで

あったとすれば、九本の大道^{だうどう}の西端^{さいたん}間の距離^{きょり}は

八里^{はちり}だったということになる。(第5図参照)

もしかしたら、両端^{りょうたん}の道路^{どうろ}の外側^{そとかわ}に、それぞ

〇・五里^{ごり}の周縁部^{しゅうえんぶ}があつて、この周縁部^{しゅうえんぶ}に外

郭城壁^{かくじやうへき}が築かれていたのではなからうか。

多分^{たぶん}、外郭城壁^{がいかくじやうへき}の内側^{うちがわ}および外側^{そとかわ}には、一定^{いじやうてい}

の幅^{はし}(内外合^{ないがいあ}わせて〇・五里^{ごり}の幅^{はし})の^木や

建築物^{けんちくぶつ}等^らが無く^なて見通^{みとお}しのよい^{五入禁示}の監視^{かんし}域^{いき}

が設^{もつ}けられていたの^だらう^う。

と定^{さだ}めなら^ない^ミと^ミな^ミがと想像^{さうぞう}される。

すなわち、^ミ鎭京^{しんけい}の都^{みやこ}の都城^{とじやう}全体^{しんじやうぜんたい}の平面形状^{へいめんけいじやう}

は、九里四方^{くしりほう}の正^{せい}方形^{けいけい}とされたように推察^{すいさつ}さ

れる^ミ。(巻頭の第5図参照)

米

1026

741213⁸

大カン71370' 井内
③ 藤でない
1033-1/4

新書目録 106P
(都) 千数千里
3830P
2751P

長 2007
 歩 長 2007 (R=1間)
 中 都 35 西久 12/3
 ⑥ 小 47 48 周 時代 区分

三五參照

つまり、周代の一方里は  三百歩四方 

とある。
(7) 中国の帝都に村田治郎、鯨芸舎

敵
公
田
居
一
L

古者三百步爲里。名曰井田。井田者九百

また、
春秋穀梁伝
宣公十五年条に、

とある。(中国の帝都) 村田治郎、綜芸舎、二五頁参照

子 乃 膝 文 公 章 句 上

自の田を耕作して自家の収入にする

とーて納め小は公事が済む。お父の八家は各

39^p } 738^p

公田は八家が共同耕作して、その收穫を税

家で
め
け、
各々
一
百
敵
す
つ
を
自
家
の
所
有
に
す
る

中(ちゅう)心(しん)のサ
一
百畝(せ)をえん
公田(こうでん)と
り
の
八百畝(せ)を
ハ

の
 と
 ち
 が
 九
 つ
 集
 合
 一
 た
 ち
 へ
 な
 る
 そ
 の
 う
 ち
 の

子
F1)
を
人
小
田
状に
区
画
す
小
ま
一
百
畝
百
歩
四
方

7 月 金
— ス
方 里 ほ
寸 な う
わ
ち
三
百 2007 歩 ほ
四
方 う
の
土 と
地 ち
に
井
の

古
 末(戦国時代)の
 子
 孟子の
 子
 の
 説明
 に
 関

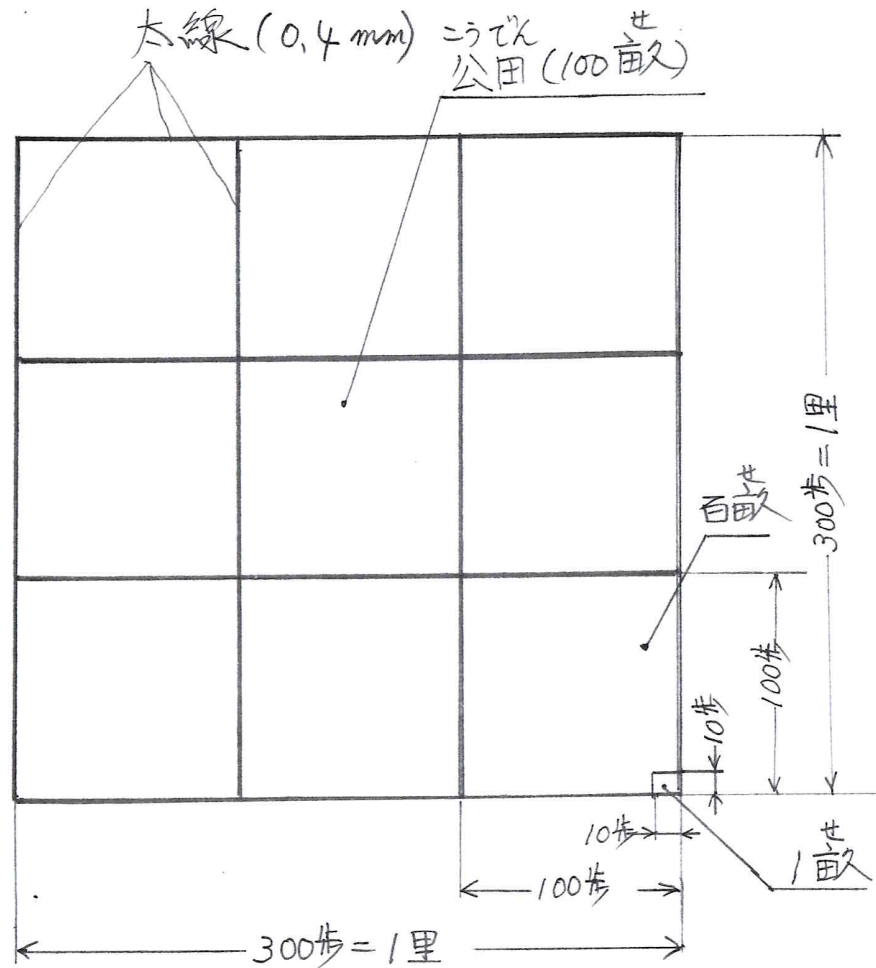
周代の井田
 参考
 前三七二
 前二八九

長士九里に一ついであす少々述べてみよう(第37回)

江戸
 町
 の
 一
 里
 お
 よ
 び
 都
 城
 一
 切
 の

1033^P - 2/4

- ・ 頁の上。半頁。
- ・ 大きくはみ出に掲載下さい。



1489 第237 図 周代の井田 (900 畝)

小林卷末 114^p
1里 = 300步
1步 = 6尺

233

LV

L033^{P-4}/₄

3并四元

⑦ 1018^P 11

0/5

⑦ 1358

1018 P 11 9/

$$2 - \frac{2}{2} \quad 8 \text{ 足} \times 11 \text{ 足} = 88 \text{ 足}$$

(録の石化
原稿用紙下書き)

* 今後の~~進展~~突明を待ちたい

待古来

けでなあるまいから、
今後の慎重な究明

＊遺物出土の多ハ所カ今宮跡跡に達といふ

[illegible]

Handwritten notes on lined paper, including the word "Biology" and various symbols and numbers.

都帝
と
て
桑マサキ
か
れ
た
こ
と
な
る
子
ら
と
思
わ
ぬ
る

京の王城に
 郊外に
 郊外の王城に
 とともに
 理想

「この方は、ちよつと奥様であり、疑眼視される。」

西端よりだつたからう
いふ)

不即 (第 23 區) 陽西下。目大。讀。不。參。目。

か
は
三
四
方
の
城
師
の
何
処
に
あ
た
の
か
に
現
存

5
しほう
うあ
とど
に

口安客席

トール
きよだいせいせき
ちゅうおうきうけつ

の
頃
に
お
い
て
既
述
)

1028^P
1029

第十四章 中原の周当初の
邲鄴の王城

巨大遺跡は、
約三時四方
もあるという

* (な) (お) (い) (せき)
 今の洛陽の西方の渭水（お）の東に
 のこる

と本修
いま
うよう
せいほう
かんすい
ひかり

乃乃、三週象工水及。

の都城の一面は、三つ四時ほどだったのであ

図ともあ水、周初の頃に王都とさ水左正方形

であつた計算になる。

けえ }
えき }
にん }
けい }

古代中-周81~82
周公(旦) 乙1044

1,034

下

①② 乙1049
乙1021

ヤヤニ 10⁸前
乙21 中乙1014 乙1013

乙1023
ヤヤニニ

洛邑・成周の構造

↑↑↑ 鎬京の東方へ中原に築かれた

それにして、洛邑・成周は、一

体どのような構想の都城だったのであろうか。

現在「洛陽」と呼ばれている洛水流域のこ

の地に「周第二代成王のころ」

① 洛邑（鎬京を国都とする周の人々か、

中原の殷民を支配する為の拠点として築いた所や当初

先祖の宗廟や先君の位牌が置かれていなかったの

で「邑」と呼ばれた

② 成周（殷民の居住域）

という二つの都城が存在していたとされる。

そして、洛邑も、成周も、ともに

周公旦によつて築かれたといわれている。

もつとも、周公旦が理想とする国家の

造営したこの都の実際の形態について

かでなく、内部の配置などについてその全

貌を明らかにするとは困難である。

さらに、このようにして中国の歴史

に華々しく登場した洛邑および成

周の相互関係について、史書の記述

以下、巻頭の第6回参照

乙1041
新乙1014
乙1013

前頁10 あったのせうかい

④1100^P 東部④1022^P

中部の部南18^P 3^P

下部④1022^P

1.035^P

④1100^P
④1016^P
④1045^P

中部の部南18^P かなん 広440^P
中部の部南18^P かなん 河南

④1034^P 1/2 部南20^P

HIV

は入リ乱小ていて、とても分かつているとは云
えない。
[] 先ず、現時点での通常の解釈を
わいて述べておこう。
④班固の漢書(卷二八上の地理志上)を見ると
①河南郡の雒陽県の注に、
「周公が殷の民をここに遷して成周とした
②また河南郡の河南県の注に、
「周公が営んだ洛邑である」
と記さる。西周到初期に造られた城は三座あつて、
一座は瀍水の東の下都すなわち成周であり、
他の一座は瀍水の西、瀨水の東の雒邑すなわ
ち王城だと解釈し、したかつて漢代には成周
が雒陽県になり、洛邑が河南県になつた
と一般に説明されてきた。「中国の帝都」村
田澄郎、綜芸舎、(一頁参照)
[] 成周城が東に、洛邑王城が西にあつた為
に、人々は成周を東周と称し、洛邑王城を西
周と呼んだ。現在の洛陽市はこの両都の中

「ところか」

① 1032^P-3/4

② 1043^P

1036^P

千二〇七〇(118.9.27)

大
元
550^P
144^P

南1040°-2/18日
東西

(2)

支里①1028°55分

元
550^P

疑問視す子意見が提示された。

あつたとする従来の考えに対して、近年、

一城説

*

迎し服部克彦、ミネルヴァ書房、八五頁参照)

というのである。(「古代中国の都市とその周

いたところである

後身であり、前漢時代に河南郡治が置かれた

後身であり、前漢時代に河南郡治が置かれた

た。後漢・曹魏・西晋の都城として、脚光をあ

周時代の国都として、広い意味の洛陽であつ

とは東西に少(位置を異にするが、ともに東

へ支里)に当る。洛邑王城と洛陽(成周城)

里(支里)にあり、成周城は雒陽(東北二十里

間)に位置し、洛邑王城(河南)はその西方五

里(支里)にあり、成周城は雒陽(東北二十里

間)に位置し、洛邑王城(河南)はその西方五

里(支里)にあり、成周城は雒陽(東北二十里

元
1514

中口の帝前 53° 18' 45"

中口の帝前 18° 45' 10" H18.9.27

1018° 版由 1019° 1/2

1038° 1/2

1066°

城跡がそれであらう。と解すべきで、いま渭水（渭河）の東に残る城跡がそれであらう。然見当らない。一、の注目すべき城跡であり、それ以外には全陽の西方の渭水の東にのこる巨大な遺跡が唯まで溯る故城の遺跡を探索した結果は、洛今、洛陽城とその近辺で、西周時代は、同時に考古学的調査によっても、それが支持される現状である。ことを挙げたい。主張する宮崎説にたちまち傾くのであるが、ない。文献的に二城説を否定して、一城説をける。文獻的に二城説を否定して、一城説をける。大都城を、今の洛陽に近しい場所に二つも設ける。文獻的に二城説を否定して、一城説をける。ない。文獻的に二城説を否定して、一城説をける。主張する宮崎説にたちまち傾くのであるが、

村田治郎、綜芸舎、一八頁参照

という主旨の主張である。（「中国の帝都」

すなわち王城（洛邑）でなければならぬ。成周は

あり。逸周書は作雒解によれば、成周は

中口の帝前 53° 18' 45"

渭水（渭河）

④1019¹

(かなから、次頁8行)
1038^{P-2} / 2

前頁18行の頃

なにかを
重複 1458^P

④1011^P ④1017^{P-2} ④1018^P

一ハ、五三頁参照)

・なお、渭水の東にのこる巨大遺跡について

は、既に第十四章へ中原へ周当初の日郊鄆の王

城の項において述べたので、ここでは重

複を避けたい。

・つまり、村田治郎氏は、

へ成周と洛邑は、別々に存在していたのでなく、

しかも今の洛陽の地にはなく、――渭水

の東にあったのであろう。

という。

これはいながら、洛陽西方の渭水の東にのこ

る巨大な遺跡が、日郊鄆であり、日成周

であり、日洛邑であつたろうと考えてみて

全てが解決するとは思えない。

先述のようによつて、この物語においては一

へ洛陽西方の巨大な遺跡は、成王の時の一

時都とされた(中原の周当初の)日郊鄆の王

城であつたろう。

と考えるみた。

*

戦代 陽渠水が整えられたという。

④ 1057^P-3/2 ④ 後漢 1949^P

1039^P

東周 (春秋・戦国) 320^P おおが 292^P
1か1なから前129 大掛り

では、今の洛陽の地からなぜ西周時代に溯る遺構・遺物が見い出せないのか。

西周時代の当初周公旦が今の洛陽あたりに日洛邑をおよび日成周邑を築かれたのであれば、西周時代に溯り得る遺構・遺物が必ずや有る筈であ

ろうと思われぬのに、それが見い出せないというのは不審なことである。

しかしながら、洛陽城の構造を要する大掛りな土木工事が長い年月の間

に幾たびも行なわれたようである。その概略について予め述べると、例えば、

・周後半の東周時代における最外郭城の修築、宮城城南面部の大幅な拡張、

・後漢末の洛陽城炎上後、曹魏時代のめざましい復興、宮城城西北隅の金墉城築城、

・晋時代の宮城城東南部の大規模な拡張（従来の九六城から、九七城への拡大）

・北魏時代に宮城城の大幅な変更、
などが、次から次へ行なわれていったと考

えられる。
こうした大土木工事等によって、西周時代の

周の歴史 (17-797 小町49 表)

(11-81^P 小町49 表6回)

小町56 利国 北殿 (17-88)

振ぐだい

20年 朔り得る 890^P

⑤ 1070^p・129ⁿ

⑤ 1040^p - 1/2

⑤ 1000^p - 3/2

洛陽城の発掘は 1190 行われている ⑤ 1159-3/3

遺物か後代のさまざまなものと混りあい、
――西周時代の遺構・遺物を特定しにくい現状に
なっているのかも知れない。
⑤ 洛陽の近傍に洛邑・成周があった
として書き進めてゆき、
*
⑤ 成周(殷民の居住区)と洛邑(支配者である周の人々の居住区)とか、全く切り離され、二座別々の場所に作られた。などということがあるのだろうか、疑問に思われる。
⑤ 成周は、一体どういう理由があつて、陽に近い場所に二座も設けなければならなかったのだろうか。
と考えるとき、―――どうしても、納得のいく答えは得られない。

